



出席者

樋口 恵子 *Keiko Higuchi*

NPO法人高齢社会をよくする女性の会 理事長

1932年生まれ。東京大学文学部卒業。同大学新聞研究所本科修了。時事通信社等を経て評論活動に入る。86～2003年東京家政大学教授、2000～2003年「女性と仕事の未来館」初代館長。現在、高齢社会NGO連携協議会代表、東京家政大学名誉教授を務める。主な著書に『祖母力』（新水社）『チャレンジ』（クラブ社）『私の古い構え』（文化出版局）などがある。

talk

対談

何かお役に立つことは 高齢者のふだん着の自立と社会参加

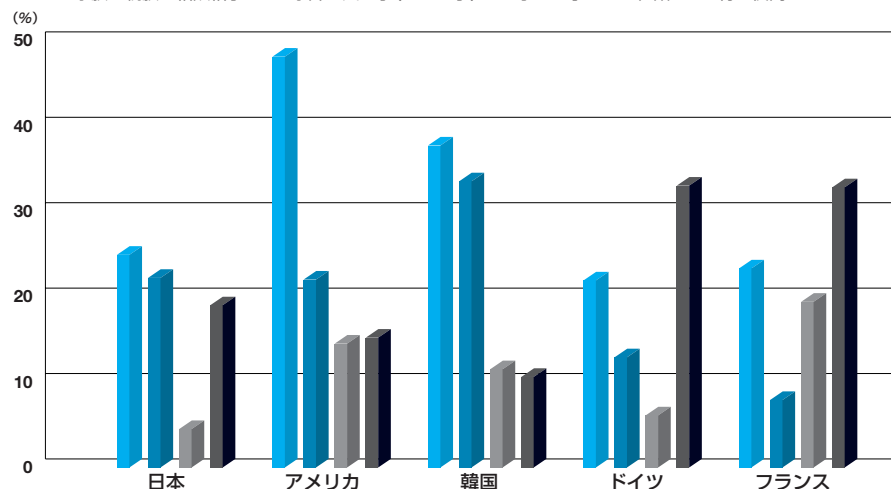
高齢者が、地域や社会でどのような役割を果たせるかというテーマは定年退職後の生き方などとも関連して、いろいろな場面で取り上げられるようになってきている

また家族関係の変容とともに家庭内の高齢者の役割にも変化が生じている
高齢者自身の個性や経験を生かして、そして何よりも楽しみながら家族や地域とかかわり、その役割を果たしていくためには
どんなことが求められているのか

祖父母のパワーに注目して本を著された樋口恵子氏と
定年後の一人ひとりの人生を丁寧に取材してこられた加藤仁氏に
さまざまな視点からお話を伺った

● 家族の生活に果たす高齢者の役割（複数回答）

■ 家族・親族の相談相手 ■ 家計の支え手（かせぎ手） ■ 小さな子どもの世話 ■ 特に役割はない



出典：内閣府「高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」／2006年
注：施設入所者を除く60歳以上の男女を対象に調査。日本は2005年11～12月、他国は2005年12月～2006年2月に調査実施。



加藤 仁 *Hitosbi Kato*

ノンフィクション作家

1947年生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。雑誌編集者を経てノンフィクション作家となり、定年退職者の生き方や高齢者福祉の実情を取材、執筆している。主な著書に『介護の「質」に挑む人びと—新しい扉をひらいた二十八人』(中央法規出版)『定年後—豊かに生きるための知恵』(岩波書店)『たった1人の再挑戦—早期退職者65人行動ファイル』(読売新聞社)などがある。

加藤 ● 樋口さんのご著書『祖母力』*1を拝読して連想したのは、今の世の中では考え方がすべてにおいて、非常に「単眼」あるいは「単細胞」であるということだ。マスコミも同様に、いわば一方的な見方になっていることに強い不満と危惧を感じている。複眼的な発想ができにくくなっていることの一つに、祖父母の影響力の低下があるのではないかと。

私は1947(昭和22)年生まれだが、大正生まれの両親は戦後の混乱期の生活に追われていたため、明治生まれの祖父母に育てられた。今思い返せば、祖父母からは「道は一つではない」ということを教えられたと思っている。世の中にはいろいろな価値観があり、地域でもさまざまな大人や子どもがその人の個性そのままを受け止められ、生かされているということを祖父母が身をもって示してくれたと思う。

両親は自分の子育てに対して責任やプレッシャーがあるが、それに比べて祖父母は無条件に「いい人」として孫に接することができる。実は「いい人」であることは非常に大事なことだ。祖父母は優しさや許容範囲の広さをもって孫と接し、愛情を育む存在といえる。

家族だけではなく地域の中で子どもの存在そのものを、肯定し受け止め甘えさせてくれる人がいることは、閉塞感の中で生きざるを得ない今の子どもにとっては、と

ても大切なことだと考える。高齢者の果たすべき役割はそこにあるといってもよいと思うのだが、最近気になるのは祖父母までもが、子どもを一つの価値観にあてはめようとする傾向があることだ。

樋口 ● 60代の祖父母自体が、受験戦争にどっぷり漬かって育ったせいもあるのだろうが、『祖母力』の中でも書いたように私も現在の祖父母の在り方に疑問を感じている。

私が子どもの頃は、既に祖父母が亡くなっている友人がたぐさいた。しかし、平均寿命が延びたおかげで、現在生まれる子どものほほすべてが続柄上は祖父母を持っている。ところが、加藤さんもおっしゃるように核家族化のせいで祖父母との接触機会が大変少ない。

せっかく人生100年を喜ぶ時代になったのに、家族の中では祖父母の影響力は低下してしまって、甘やかす存在になっている。それならば「地域」で出会う術をつくるようにしようではないか、と考えたのである。

個別の祖父母ではなかなか難しいので、地域の中で社会的祖母力、社会的祖父力を高めていくということだ。特に社会的な経験を豊富に持ち、複眼的な視点を持っている祖父には、ぜひこれからがんばってほしい。

加藤 ● 残念ながら、老いの現実には祖父母を家庭や地域から切り離す方向へと進んでいる*2。例えば、本来老人ホームは地域



【*1】

『祖母力』(新水社/2006年)

急激な高齢化と女性の就労増加により、世界的に祖父母の果たす役割の大きさが再評価されている。祖父母世代の孫育ての在り方や今と昔の家族関係の変化などを踏まえ、これからの祖母力についてまとめた1冊。



個人の確立から連帯へ、そして21世紀は地域再創造の時代

のさまざまなものを資源として成立していく必要があるのに、その施設の中にすべてを閉じ込めてしまうようなシステムをとっている。まず施設を地域に向けて開くべきだと思う。

樋口 ● 少し抽象的にまとめてみると、21世紀は「地域再創造の時代」だと思う。私の歴史認識では19世紀が「人権確立の世紀」、20世紀は戦争の世紀であった反面、労働組合や生活協同組合が広がり、何よりも社会保障制度が先進国の制度として普及したという意味で、「連帯の世紀」であった。つまり、個人の確立だけでは幸せになれないことから、いろんな連帯が生まれたわけだ。

しかし、高齢化の中でせっきくの連帯が依存の拠りどころとなってしまう、最初の個人の確立ですら曖昧模糊になる危険性も併せ持っているのが、今我々が生きる21世紀であろう。

19世紀で確立した「個人」も20世紀で確立した「連帯」も、時代の進歩とともに発見した大事な遺産であるから、これを否定してはいけない。大切に守り時代にふさわしく育てていく。

それを踏まえながら人生100年という考え方で見ると、先日AARP (p.16参照) が「Reinventing Retirement」(定年の再創造) とい

っていたが、定年の再創造の受け皿となるのが地域の再創造ではないかと思う。

加藤 ● 確かに、現役サラリーマンや若年層に地域にかかわることを期待しても、現

实的には難しいと思う。しかし地域社会の疲弊、空洞化も進んでおり、このままでは地域社会のよい部分が失われるという危機感は強い。

現役を引退することを一つの契機として、団塊世代などによる地域社会の再構築は最優先課題だと思う。

樋口 ● その通りだと思う。昔のような個人を埋没させた共同体型の地域への回帰、ということではまったくない。昔のよい部分の精神は残しながら、方法論としては21世紀型の地域を興していかなければならないと思う。

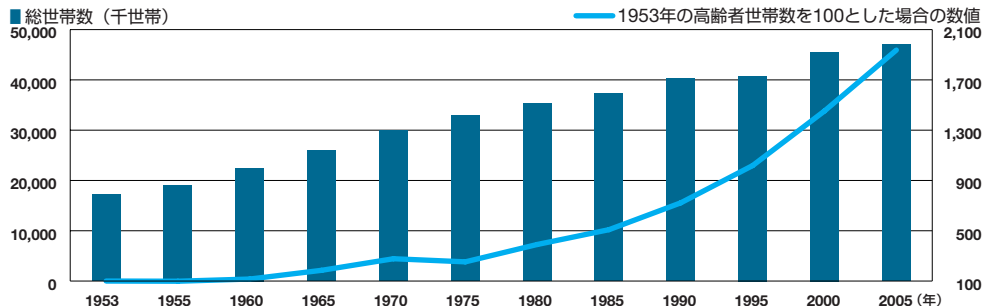
地域社会のことを英語で「local community」というが、ふと思いついて漢字で書き換えてみた。「local = 老可留」——漢文で読むと「老人そこに留まるべし」となる。つまり高齢者が地域から疎外されことなく、自分の生きてきた一続きの人生の中で、その場所に留まるべしという意味だ。

加藤 ● 私の実感としては、もちろん家族が育ててくれたことは確かだが、地域に育ててもらったという思いもある。いい意味で町内の人たちがちゃんと叱ってくれた。今すぐにそのような関係性を復活させるのは無理かもしれないが、何かのかたちで置き換えることはできるのではないか。

樋口 ● 地域の再構築は実は国際的にも大きな動きになっていると思う。2004年に『Generational Review』(オックスフォード大学刊) でgrandparents特集が組まれた。イギリスでは「祖父母協会」が組織されており、その理由の一つは離婚家庭が多いこと。離婚家庭を崩壊から食い止めているのが祖父母力なのだ。

【*2】核家族、高齢者世帯の増加

出典：厚生労働省大臣官房統計情報部「国民生活基礎調査」
注：「高齢者世帯」は、1974年までは「男65歳、女60歳以上の者のみで構成、またはこれらに18歳未満の未婚の者が加わった世帯」、1975年以降は「65歳以上の者のみで構成、またはこれに18歳未満の未婚の者が加わった世帯」をいう。



また長寿化により、現役で働く嫁や実の娘へのサポートとしての祖父母力がクローズアップされるようになったこともある。離婚と長寿化により、高齢者が家族と社会を支える実力者だ、ということがようやく理解され始めたのだ。

2005年にイギリスを訪問した折に、イギリスの文科省とエイジコンサーンが協働で全国各地の小学校での「メンター(Mentor)」の採用を促進していることを知った。普通規模の小学校に7人程度のメンターを置く。申し込みには三つの書類(①犯罪歴がないという警察の証明書②今まで勤めていた会社の企業主なり上司の推薦書③作文)が必要で、各地区の教育委員会とエイジコンサーンが協議のうえ決定する。

ウィンブルドンに近いキングストンという町では、地域の採用責任者が「ついに我々は男性ボランティアの鉱脈を探り当てた」と興奮して喜んでいて。日本も同様だが、イギリスもボランティアの活動は中高年の女性を中心に、男性の参加はあまりうまくいっていないのが現状である。ところが今回、子どもの学習指導のできる人、技能を持った人格のしっかりした人を選んだところ、7人選ばれたうち、期せずして6人が男性で、前歴は中学校の校長や獣医などだったようだ。

メンターは、教師の仕事である授業で教えることも手伝うが、時間外で子どもたちの面倒をみることをその役割としている。例えば、教職員組合との協定で学校の門は8時にしか開かないが、移民の家庭など親が早くに働きに出る場合は、7時に校門を開けてほしいという要望が多くある。そこでメンターが門を開けて、朝食を食べてこられない家庭の子どものためにサンドイッチなどの簡単な朝食を用意し、また夕方学内で学童保育のような役割を果たす。親が英語を話せない子どもも多いので、メンターは授業にも参加して担当する子どもが学習に遅れないような手助けもしているようだ。

加藤 ● このメンター制度が素晴らしいと

思ったのは、人数が1人2人ではなく7人というところではないだろうか。日本でも民間企業からの校長採用など、学校の改革が話題になるが、新しい試みがつぶされるケースも多いと聞く。ある程度の数を確保し社会的に祖父母力を活用することを勧めていけば、現役教師の負担軽減にもつながることが理解されるだろうし、メンターと教師の双方が協力することで、子どもにとって本当によい教育を行えるのではないかと思った。

樋口 ● 男性の力の活用という視点では、実は日本でもおもしろい取り組みがなされている。東京都杉並区では、普通のサラリーマンが退職後「男の料理教室」に通い始めたことをきっかけに、仲間が生まれた。当時区が推進していた中学校の空き教室を利用したデイサービスを、「男性が通いたくなる」ことを一つの特徴として、その仲間が中心となりボランティアで始めたのが、「松溪ふれあいの家^{*3}」である。

加藤 ● 私も「松溪ふれあいの家」には何度も取材に訪れている。男性の視点から見ると、現在の介護環境には満足できない部分が多い。だったら文句をいうだけでなく、自分がいきいきできる場所をつくらうという発想は前向きでとても素晴らしいと思う^{*4}。またボランティアとして

【*3】

松溪ふれあいの家

学校の空き教室を活用した住民参加型のデイサービスセンター。退職後の男性向け料理教室で知り合った仲間が立ち上げたNPO法人「生きがいの会」が杉並区の委託を受け、2001年2月にオープン。「男性の知的興味を満足させるプログラム」のコンセプト通り、登録者約100人のうち、男性が7割を占めている。マージャンや囲碁、書道やガーデニングなどのほか、学校内の田んぼで中学生に米づくりの指導も行っている。



定年退職者を中心にした地域社会の再構築は最優先課題だ

のかかわり方も、パソコンでの作業とか役所との交渉とか、現役時代のそれぞれの得意分野を生かして、従来のボランティアの範囲を超える新しいかかわり方を模索している点が、大変におもしろい。

樋口 ● 女性のほうが長生きするので高齢社会、特に介護の場が女性化するのはある程度まではやむを得ないと思いつつ、やはりこれまでの男女の生き方の違いを考慮することは、必要であろう。高齢者はその歴史を負って生きてきている。だから男性高齢者が、今まで生きてきた文化になじみ深いかたちでサービスを提供するこ



とによって、日本の福祉の在り方が一定のバランスを取り戻すのではないかと思う。

加藤 ● 女性化しているとはいっても、果たして今の施設が本当に女性にとって暮らしやすい場所であるのかということは、改めて検証する必要があるだろう。いまだに女性の入浴時に男性職員が介助しているケースがあるし、化粧をする場所を設けてない老人ホームも多い。

樋口 ● おっしゃるとおり！ 私は老人ホームの質を測るものさしの一つは、施設内に美容室があるかどうかだと思っている。現在の高齢者世代、特に女性はあまり文句をいわないから、そういう要望が表に出にくいだけで、男性が入ってきて不満をいうとそれに続けて女性もいえるようになる。両方のパワーが大事だ。

男性もまた高齢期になると女性の群に埋もれてしまい、ただ不機嫌でいるだけで自分で状況を切り開いていこうとする意欲があまり感じられなかった。

若い頃から異議申し立てをし続けてきた団塊の世代が、定年退職者として地域や施設にかかわるようになると、高齢者自身、利用者自身が発言する文化が定着してくるのではないか。その意味で団塊の世代には期待している。

あり、ボランティアであり、オンブズマンでもあるという三位一体型で、地域や施設とかかわり合っていくという姿勢が求められるであろう。

樋口 ● 「何かお役に立つことは」「私でお役に立つならば」という言葉は大切にしたい日本語だと思うし、それがボランティアの基本だと思う。しかし、具体的な行動を通して人の役に立つということだけではなく、高齢者自身が「機嫌よく生きる」こと、そういう環境をつくり出すことが、実はとても大事なことでないだろうか。

少ししい過ぎかもしれないが、それが高齢者の大事なボランティアだと思う。

皆が機嫌よく楽しく過ごして、仲間の最期も心を込めて送ることができたという例を一つ紹介したい。

私より少し年長の知人が、神奈川県川崎市のある地域にシニア会をつくった。企業で役員を務めたことがあるため、リーダーになってくれと近所の人が頼みに来て、その会の初代会長を務めていたが、400人くらいの高齢者がいる地域で209名の参加者というから大変な組織率だ。規約も会費もなく、費用がかかる場合は、その都度参加した人の頭割りで賄っている。中には規約や会費を決めたがる人もいたが「ご近所づき合いに規約が必要でしょうか」と、できるだけ管理を排除する方向で通してきたという。

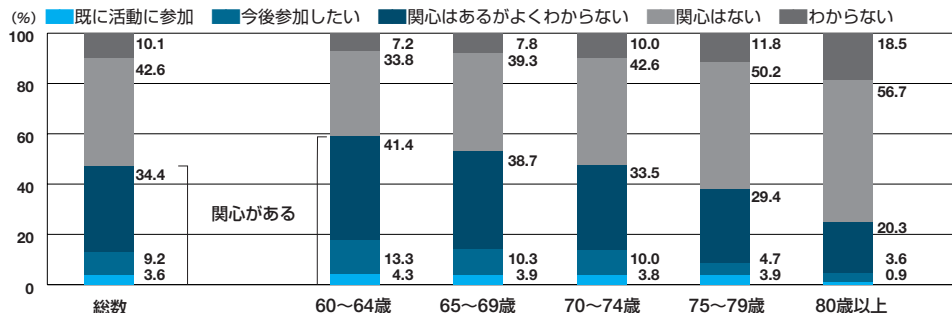
みんな元気に自発的な活動をつくり出してそれぞれに楽しんでいたのだが、ついに先日メンバーの1人が亡くなった。その方はカラオケグループに所属していたため夫人から「どうぞ出棺のときには、好

働き、賃金を得ることによってまだ現役だと胸を張れる高齢者がたくさんいる

加藤 ● 実務的な面でも、書類一つ書かせても団塊のサラリーマンは手早くてうまい。コミュニケーション能力に長けていて、交渉ごとを得意とする人もいる。これから高齢社会の一員となれば、利用者で

【*4】NPO活動への関心の有無

出典：平成18年版高齢社会白書
資料：内閣府「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」/2005年



きだった歌を歌ってやってください」といわれ、カラオケメンバーを中心にみんなで声を張り上げて故人の持ち歌を、一生懸命歌った。

近所に住んでいるだけで血のつながりもないのに、彼の生前の姿を思い出してみんなで涙を流しながら歌って見送ったと聞き、なんていい風景だろうと思った。

加藤 ●今のお話を伺っていて、恐らく川崎の方々はこの地域の中で死にたいと思っているだろうと思う。自分が死んだらこんな葬式をしてもらえると、地域でエンディングのイメージまでできてしまうというのはとても素晴らしい。

私も全国さまざまな場所での取材を通じ多くの方にお会いしてきたが、どの地域にも知恵者がいて、上手にインフォーマルな会を運営しておられる。だれもが自分の「素の姿」で身を置けるようにする、自分の歩幅で皆といっしょに歩いていけるような空気を上手につくり上げる知恵者の存在は、とても大事である。

樋口 ●自分が機嫌よく生きながら、葬式に行ったり、見舞いに行ったりする。それが人の役に立つ。人の役に立とうと構えるのではなく、自分の人生を楽しく生きようと思った結果が、人の役に立っているというのは、私はとても自然でいいと思う。

加藤 ●後に続く世代にも、こういう風に明るく楽しく年をとることができたらいいな、という見本になる。苦虫をかみつぶしたような顔で、けしからんとかつまらんとかいつているよりはずっといい。

ただ、そのことのすべてを個人の努力や心がけに負わせてしまうのではなく、社会でも高齢者が安心・快適に暮らせる仕組みづくりを考えなければならない。

どんな人でも現状に100%満足していることはなく、なんらかの不足感を抱えているはずだ。例えば金銭面でも、5万から欲をいえば10万得られる場や方法を、もっと工夫して提供できるのではないかと思う*5。

高齢者は正社員でのフルタイム勤務は難しいかもしれない。だから午前中だけと

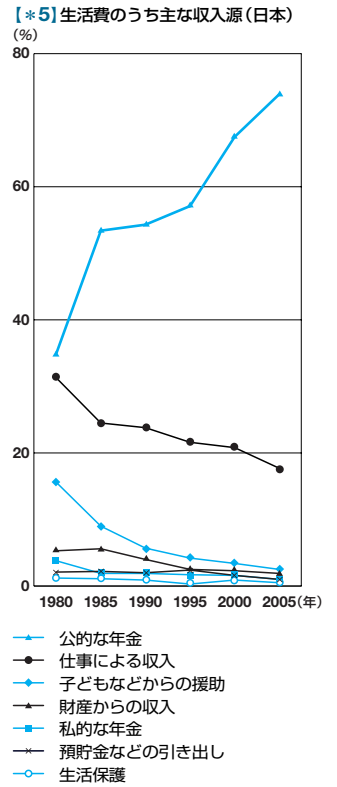
か1日2時間だけとか、区切った時間の中で高齢者が働ける環境をつくる必要がある。

岐阜県中津川市にある自動車部品工場では、土日のみ60歳以上の方が10数人ほど働いている。正社員が休みの土日に働いて生活にメリハリをつけ、月5～10万くらいの給料も入る。1年働けば夫婦で海外旅行もできるが、先ほどのイギリスのメンターの話もそうだが、そのことで正社員と高齢社員どちらも幸せになれるし、それが日本の経済を支えることにもなる。

シルバー人材センターは取り組みに地域差がありすぎるし、役所出身の所長が多く、時代にマッチングするような仕事のプログラム、メニューも少なすぎると思う。

樋口 ●民間人の女性が所長になった福井市のシルバー人材センターでは、新しいプログラムとして子育て支援を請け負っている。最近では女性の専門職も定年まで勤め上げて、栄養士や看護師など行政が必要とする資格を持った高齢者がたくさんいるので、新しい発想での仕事の掘り起こしができるはずだ。

加藤 ●孫に小遣いをやれるくらいの金は稼げるといことは、何より自信になるのだから、最低賃金法とは別にボランティア賃金みたいなものがあったもいいのではないだろうか。賃金が発生することによってまだ現役だと胸を張れる高齢者がたくさんいるはずで、それが何よりの介護予防になると声を大にしていいたい。



出典：内閣府「高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」/2006年
注：施設入所者を除く60歳以上の男女を対象に調査。



高齢者自身が「機嫌よく生きる」ことがとても大事なことでないだろうか

樋口 ●私もこのようなかたちでの介護予防こそ、何よりの社会貢献とっていいと思っている。機嫌よく人とつき合っ、少しの金を得て孫にもいばり、社会にも貢献できるわけで、だれも損をする人がいない。

効果的な介護予防メニューづくりなどと堅苦しく考える前に、まずみんなふだん着でできることを生かして元気になることが、何より大事だと思う。 <2007. 5. 29>

写真：湊 雅博